資料２

令和５年度第１回瀬戸市総合教育会議　議事録

▽日　時

令和５年９月１４日（木）　午後３時から午後４時まで

▽場　所

瀬戸市役所 北庁舎４階　庁議室

▽出席者（順不同、敬称略）

【瀬戸市総合教育会議構成員】

瀬戸市長　川本雅之

教育委員会教育長　加藤正彦

教育長職務代理者　青山貴彦

教育委員会委員　田中直美、小澤慎太郎、竹川典子、加藤千春、稲垣遼

【事務局等】

経営戦略部　部長　駒田一幸

政策推進課　課長　久野　崇、課長補佐　大矢達也

教育部　部長　磯村玲子

教育政策課　課長　谷口　塁、課長補佐　松見健一、主幹　豊田幸一、
専門員　松浦慎造

学校教育課　課長　大羽健志、主幹　此下明雄

▽議題

瀬戸市教育大綱の改定について

▽議事内容

議事に先立ち、川本雅之市長から開会のあいさつがなされた。

⑴ 瀬戸市教育大綱の改定について

〇政策推進課長から資料１・２・４・５・６に基づき、総合教育会議・瀬戸市教育大綱・新たな教育振興基本計画について説明を行った。

〇教育政策課長より、資料３に基づき、瀬戸市教育アクションプランについて説明を行った。

〇市長より、瀬戸市の教育や教育大綱改定に対する以下の考えを説明した。

・施政方針では、「まちづくりは人づくり」を市政運営の基本方針としている。

・人をつくることで、次の世代にしっかりとバトンを渡していきたい。

・暮らしの基本要素として、「住む」「働く」「学ぶ」「育む」という４要素が充実したまちを作っていきたい。

・特に「学ぶ」については、子どもたちが夢を持って健全におおらかに学ぶことができ、楽しく、また、いつまでもどこでも学ぶことの

できるまちづくりを目指していきたい。
・瀬戸市独自の教育内容を大切にするとともに、多様な教育ニーズに対応できるように、地域と連携して社会に貢献することを早くから体験できる機会をつくりたい。
・ＩＣＴ等を活用した教育を一層推進していきたい。誰ひとり取り残さない教育の取り組みを進めることによって、本市の子どもたちのウェルビーイングの向上を進めていきたいと思っている。
・「多様な教育ニーズに対応した教育環境の整備」「ウェルビーイングの向上に繋がる教育の取組み」の２点について、ご意見をいただき、教育大綱に反映していきたい。

委員と意見交換を行った。意見については、以下のとおり。
【多様な教育ニーズに対応した教育環境の整備】
委員
〇タブレットが一人１台導入されて4年目になる。4年前にさかのぼってみると、この導入に関しては様々な意見があった。一番多かった意見として、子どもたちがタブレットを持つことが本当にいいのかどうかという意見であった。実際は、子どもたちは大人の心配を超えて、上手にタブレットを使っていると感じる。
〇将来、ＡＩやＩＣＴによって人間の居場所がなくなるのではないかということを言われるが、子どもたちの姿を見ると、意外とそういうことはないのではないかと思っている。
子どもたちは、ＡＩやＩＣＴに使われていない。むしろ、上手に使おうという意識を持っていると思う。そこが我々大人と非常に大きな差がある。
〇大人はどちらかというと作られたものに合わせて活用していきますが、子どもたちは「もう少しうまく変えられないだろうか」「もう少しこういうことができないだろうか」と、非常に考えて活用している。また、活用方法についても、「こういったところはタブレットを使った方がいいのではないか」「ここは手でやった方がいいんじゃないか」といった判断を自然にやっていると思う。
〇これからの社会はＡＩやＩＣＴなしでは生活ができない時代になっており、上手に子どもたちが使えるように、今後教育の一環としてタブレットに対する危険性について、学校だけではなく、家庭においてもしっかりと教えていくことが大切である。
〇いじめの問題や、不登校あるいは保健室登校の子どもに対してもタブレットをうまく活用して、通常授業を受けているのと同じような環境づくりが大切だと考える。

委員

〇安心安全な学校作りは、最も基本的かつ不可欠なことであり、そのためには魅力ある教育環境を整備することが大切である。

〇清潔な空間であることも、教室環境を整える工夫の一つである。ＩＣＴ環境設備が導入されて、掃除をする場所が増え、先生たちの負担も増えている。また、ＩＣＴ機器は埃が溜まりやすく、静電気などネットの接続にも支障をきたすことがあるので、こまめに掃除をする必要がある。

〇コミュニティスクールを活用し、掃除ボランティアを募集しても良いと思う。

〇ボランティアに参加する高齢者の方たちの掃除の仕方も学べる機会となり、「地域に開かれた学校作り」を安心で安全な学校に結び付ける工夫が必要ではないか。全ての子どもたちにとって、よりよい学校作りを進めていただきたい。

委員

〇勉強する場として、安全であるということは大前提である。学校の耐震化やバリアフリー化、コロナの感染症対策などに取り組んでいる。

〇空調設備・冷房設備について、文部科学省の調査によると令和4年9月11日現在、瀬戸市の小中学校の冷房設備の設置率は、普通教室は100%、特別教室が51.9%、体育館は3.3%という結果である。

特別教室の設置率はいずれも県内の市町村の平均を下回っており、普通教室の設置率は統計上100%であるが、少人数指導や日本語学習指導など臨時に使用する教室は冷房設備がない。そのために、夏の暑いときになると、少人数指導をするときなど、二つにクラスを分けて指導するということはなかなか難しいと思われる。

〇事務局の方からは小中学校の長寿命化の工事に合わせて、順次計画的に冷房設備の整備を進める方針であるということだが、具体的に特別教室の冷房設置率を100%にしようとすると、まだ10年以上かかる見込みだという説明があった。ただ近年の夏の暑さはますます厳しさを増しており、夏休みの前後7月あるいは9月に入ってから最高気温は30度以上に達する日は珍しくない状況である。

〇社会的にも冷房を使って生活するということが当たり前になってきているため、学校現場においても普通教室だけでなく、特別教室や体育館についても冷房設備は必要不可欠ではないか。

〇どのようなユニークな教育を進めようとしても、まずは教育の場の安全や最低限の快適性が確保されていないと教育の効果も上がらないと考える。

〇財政的な課題もあると思うが、できる範囲で最大限の努力をして冷房設備の設置を少しでも早めることが必要ではないか。

委員
〇今、年々支援を必要とする子が増えてきていると聞いている。心の面だったり、学力の面だったり、登校拒否で学校に行けなかったり、自分に自信が持てなくって、「何のために生きているのだろう」と思う子どもたちがいることも聞いている。
〇物も大切だが、心ある人の配置や居場所作りなどを充実していいただけることを希望する。

【ウェルビーイングの向上に繋がる教育の取組み】
委員
〇ウェルビーイングの向上に繋がる教育について、メンタルヘルスが崩れる方は自己肯定感がない方が多い。肯定感というのはどういうところから生まれるかというと、自分に対する自信、今までやってきたことあるいは郷土への愛情といったところが一番大きいと思われる。
〇当然、家族環境や教育環境も影響するが、学校としては郷土学習が非常に大切である。
〇瀬戸には、さまざまなコンテンツがある。せとものや古くから歴史もあり、色々な要素が詰まっているのが瀬戸市である。
国際交流の一環でフィリピンに行った際、招き猫をたくさん持って配布したところ、大変喜ばれた。「これはどこで作っているのか」という話題になり、地元の瀬戸市でつくられていると答えた経験から、地元の良さというのを再認識するということがあった。
〇国際交流という場合においてもこういったことは非常に役に立つと思っております。自己肯定感にも繋がるとともに、自分のメリットとなるような学習をずっと続けていくべきではないか。

委員
〇ウェルビーイングの意味する「幸福感」や「快適さ」について、今までも教育現場や行政においても、子どもたち個人が幸せになれるように力を尽くしていくという思いは当然あった。
〇今ここでウェルビーイングという言葉を使って、さらに向上を目指そうというのはいいのかもしれない。
〇いろいろな価値観や環境が複雑に絡み合っていて、改めて個人の「幸せとはなにか」を考えつつ、環境や社会に対応した「幸福感」についてもを追求していく必要がある。
〇スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなど多様な専門家の

知見を活かし、協力しながら、多様な価値観に向き合えるよう全体的な枠組みで考えていく必要がある。

委員

〇子どもたちに対してウェルビーイングについて話をしていくうえで、前提として我々大人がウェルビーイングを自分たち自身が感じているのだろうかと言われると、非常に難しいところがある。

〇子どもの問題ではなくて、社会全体の問題であって、社会としてまず「どういったものが、自分にとってのウェルビーイングであるか」について子どもたちに伝えていく必要がある。

〇自分が経験したことは伝えることができるが、経験していないことは伝えることが難しい。

〇今の子どもたちは、我々大人が経験してないことをいろいろ経験している。大人が経験してこなかったことはやはり自分で見つけてもらうしかない。そのた、大人が経験してきたことで、子どもたちの手助けになることがあればきちんと伝えていかないといけない。

〇例えばいじめ問題についても、我々の時代にもいじめ問題はあった。それでも、なぜ今でも解決してないのかということを、子どもたちに問う前に根本的な問題として大人が考えていく必要がある。

委員

〇教育現場においては、教員のウェルビーイングについても考える必要がある。教員が非常に忙しいというところもあるので、教育現場全体として、教育行政として教育のウェルビーイングに関しても、大切にしていきたいと思っている。

教育長

〇現在は主体的対話的で深い学びを目指して教育をおこなっている。

〇学習指導要領に基づき、各学校で授業が行われているが、ＩＣＴを活用しながら、知育、徳育、体育の一体的な成長を育む「令和の日本型教育」が各学校で現在実践されている。

〇本日の総合教育会議では、次回の瀬戸市教育大綱の改定に向けまして、大きな二つの柱で意見交換をすることができた。

〇教育委員のそれぞれの皆さんが意見をいただいたが、どの意見も瀬戸市の子どもたちの学びを保障し、瀬戸の将来を担う人材を育成していくという目的に基づいたご意見であった。

〇本日の意見を、次回の会議の場でおいて示します教育大綱の案に繋げてい

きたい。

〇今後も市長部局と教育委員会が子どもたちの将来を念頭に置いて、成果と課題等を共有しながら、連携を進めていきたい。

市長

〇次回第２回の総合教育会議において、本日いただきましたご意見をもとに大綱案をご提示させていただきたい。

３　その他

なし

議事を全て終了し、川本雅之市長から閉会のあいさつがなされた。